

題名：国史編纂委員会の訪問と韓国の史料電子化

氏名：大沼巧

所属：東京大学大学院人文社会系研究科

専攻：韓国朝鮮文化研究専攻（歴史文化）博士一年（2016年3月現在）

近年、韓国では歴史史料の電子化が急速に進んでおり、日本にしながら、多くの史料に接することができる。知り合いの韓国人研究者に聞いた話では、韓国の地方においても研究する時代や分野によっては、必要な史料を手に入れることができるため、ソウルに行かなくても大丈夫だということであった。日本でも若干の電子化が進んでいるものの、韓国のこのような状況は日本史研究者などからしたら、おそらく考え難い話だろう。今回のワークショップで訪問した国史編纂委員会は、そのような韓国の歴史史料電子化を象徴するような機関であり、訪問前から強い関心を持っていた。

国史編纂委員会の掲載している史料は、活字化された史料を読むことができるだけでなく、史料によっては史料の原文や韓国語訳も見ることができ、韓国史を研究するものにとっってはなくてはならないものになりつつある。当然のことながら、私も研究を進める中で多く活用させてもらっており、ある程度有効に使用できていると感じていた。しかし、今回のワークショップでは、これまでの自分の活用法以上に便利な利用方法が多くあることを知ることができた。例えば、国史編纂委員会が作成している韓国史データベースでは、目録を Excel ファイルに変換できるということを初めて知った。また、史料引用の方法などについても説明があり、参考になるところが少なくなかった。

その一方で、今回のワークショップを通じて、電子化による問題点も実感することとなった。すなわち、史料の電子化が急速に進む中で、紙媒体の史料の比重が低下しているという点である。国史編纂委員会に限ったことではないが、今回訪問した機関のなかには、紙媒体の雑誌や本の入荷が以前と比べて急速に減少している機関が少なくなかった。また、以前は国史編纂委員会でしばしば発行されていた紙媒体の史料集も、急激に減り、近年ではほとんど行われなくなってきたということであった。確かに、電子史料は便利ではあるが、実際に史料とじっくり向き合うときには、紙媒体の史料と向き合う必要がある場合が多い。また、自分の求めている内容の史料が、検索ワードに引っかかれば目録を作成するなどして効率的に研究を進めることができるものの、実際にはそうでない場合も多い。近年の韓国の一部の若手研究者のなかには、インターネットから引用したとわかるような誤った史料の引用法もしばしば確認できることから、今後は電子化の欠点についても十分に気を付ける必要がある。

しかし、そうはいつでも史料の電子化の価値は高く評価されてしかるべきである。今回の訪問時には、国史編纂委員会が運営している各種サイトでの史料の検索方法についても説明していただいたが、それを聞いたうえで史料を検索したところ、私の研究に関係があり、まだ把握できていなかった多くの史料がインターネットを通じて利用できることが分

かった。このように、国史編纂委員会の事業は、インターネットを使用できる環境であればあらゆる地域でさまざまな人が同じ史料を閲覧できることを可能にしたという点で、研究上の格差を大きく減らし、韓国史研究進展に大きく貢献しているといえるだろう。さらに、国史編纂委員会では韓国史に関する市民向けのサイトも運営しており、韓国史教育の普及にも努めているといえる。

一方で、日本に目を向けると、韓国のような電子化が進んでおらず、そうかといって紙媒体の史料集の発行も盛んであるともいえない状況である。もちろん、インターネットサイトでの教育活動も国史編纂委員会の規模で行われているとは到底いいがたく、研究者・学習者ともに韓国に比べると不便な状況である。今後は、日本に韓国のような取り組みを期待したいし、また現在すでに電子化が進んでいる韓国ではそれに伴う問題点とその対処法について考えだされていくことを期待したい。

私にとって、韓国の史料電子化の現場を実際に目にすることができ、その活用法についても学ぶことができたという点で、非常に意義のあるものだったと感じている。